出会い、ふれあい、心の輪

〈完全参加と平等〉

令和６年度入賞作品集

心の輪を広げる体験作文
障害者週間のポスター

令和６年11月

富　山　県

目次

心の輪を広げる体験作文入賞作品

最優秀賞

中学生の部

自分だけの個性　富山市立三成中学校　三年　結城蘭……1

高校生の部

知ることの大切さ　富山県立南砺福野高等学校　一年　西川和奏……3

一般の部

盲導犬を連れた方との出会いについて　伊藤はるみ……5

優秀賞

中学生の部

寄り添う言葉は人を助ける　富山市立三成中学校　三年　堀　勇翔……7

普通の人とは違う自分　富山市立三成中学校　三年　桐澤蓮樹……9

高校生の部

笑顔のために　富山県立南砺福野高等学校　一年　出村琳湖……11

「伝える」ことの大切さ　富山県立南砺福野高等学校　二年　松田侑佳……14

障害者週間のポスター入賞作品

最優秀賞

中学生の部

支えよう障害者　射水市立小杉南中学校　三年　山本大智……16

優秀賞

中学生の部

互いにわかりあえる社会へ　射水市立小杉南中学校　三年　出本（でもと）　一（いち）……17

心のピース　射水市立小杉南中学校　三年　長谷川（はせがわ）　奈南（なな）

参考資料

令和六年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領……18

令和六年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況……22

令和六年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿……23

本作品集に掲載する作文は、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

【中学生の部】○最優秀賞

「自分だけの個性」

富山市立三成中学校　三年
結城（ゆうき）　蘭（らん）

私の妹は、ＡＤＨＤという発達障害を持っています。軽い方なので一度見ただけでは、分からないと思います。

ＡＤＨＤは注意欠如多動症と呼ばれ、話を集中して聞けない、なくしものが多いなどの「不注意」、おしゃべり、順番をまてないなどの「多動性」、「衝動性」の特徴が見られることを言います。確かに妹は、少しの間でもじっとするのが苦手だし新しく買った物はすぐなくす、もしくは落書きしたりして物を大切にしない。性格も客観的に見れば、人の言うことは聞かないし、自分の思い通りにならないとすねて、ブツブツ独り言を言うこともしばしば…。こういう面を見ると周りからはただ、わがままで他の人があわせないといけないから面倒なだけに思えます。

しかし、今の時代そんな人は珍しいわけはありません。理解しようとしている人たちもいる中、私の祖母は妹の発達障害をよく思っていません。祖母にとって発達障害は、「足し算もまともに出来ない子供」悪く言ったら、「バカ」だと思っているのです。祖母は、「みんなのように普通のクラスに入って。」と、よく妹に言っています。妹の態度や行動には腹が立つけれど、それより私は「普通」ってなに？と思ってしまいます。

障害をもっている人は「普通」ではないのか。どんな人が「普通」と言われるのか、と…。妹の年上に対する行動や態度は、少し難ありですが妹にも優れたところがたくさんあります。例えば記憶力です。一度通った道はほとんど覚えているし、学校で劇をするときには全員分のセリフを丸暗記して練習していました。このように、他の人たちとは頭一つぬけているすごいところもあるのです。妹も、ほめられると嬉しそうにしています。

「人はほめられて、よくのびる」という言葉があります。

失敗して注意する場面でも、まず努力している部分や上手くいっている点をほめる事が大切です。当たり前にできると思っても妹には案外難しいこともあります。だから、注意した後は具体的にもっとこうしたらいい。など分かりやすい例をあげて、気をつけるようにうながします。

世界には様々な障害を抱えている人がたくさんいます。その中で「発達障害」は見ただけでは分かりにくいかもしれません。しかし「障害」は誰しもが抱える可能性があり、もっている人が悪いわけではありません。みんなそれぞれ一生懸命今を生きているのです。

「障害」がある人もない人も、みんな他人よりも優れている自分だけの個性をもっています。その自分の個性を生かして、のびのびと生きていけるように、互いに相手を認め合える社会にしたいと思います。

【高校生の部】○最優秀賞

「知ることの大切さ」

富山県立南砺福野高等学校　一年
西川和奏（にしかわかなで）

私が中学校三年生のとき、祖父が大腸がんを患った。祖父は大腸がんのステージ３になり、手術でストーマをつけることになった。ストーマとは、人工肛門のことで、腹部に手術によって作られた、便や尿を排出するための出口のことを言う。そして、祖父はいわゆる「オストメイト」になった。

手術を終えた祖父は、今までとはまるで別人のようになった。今までは、田んぼの様子を見に行ったり、地区の行事に積極的に参加したりして、外にいるイメージが大きい祖父だったが、今では部屋にこもりがちになった。外や人がたくさんいるところに行くと、パウチという便や尿をためるところが、心配になるからだと言っていた。また、おなかに力をかけることが怖くなり、昔から続けていた農業を辞めた。そうして、祖父だけでなく私たちの生活も１８０度変わった。私たちは、祖父に合うような、おなかに優しいご飯を作ったり、オストメイトに対応できるようなトイレを作ったりして、祖父が生活しやすい環境を整えた。だが、私は祖父の病気についてよく分からず、明るく元気だった祖父が徐々に元気がなくなるところ見ることしかできなかった。私は、今までとは違う祖父を見て、祖父との関わり方が分からなくなった。

そんな時、私は授業で認知症との関わり合い方について習った。その授業では、まず会話をすることが大切だと教わった。祖父が、大腸がんだけでなく認知症も患うことがないように、私は祖父と話すことを心がけて生活した。何気ない会話だが、祖父が笑ってくれる。それが、私にとってはとても嬉しかった。

私は、障がいをもっている方が普段どのように過ごしているのかが気になり、障がいについて知ろうと思った。そのために、私は出かける時は障がい者のピクトグラムを見つける

ことを意識した。祖父が一番困っている排泄の問題を少しでも理解できれば良いなと思ったからだ。今までは意識して見ることがなかったけれど、探すといろいろなマークがあることを知った。盲人のためのマークや車いすのマーク、赤ちゃん用のマークなど一目で分かりやすいマークが多かった。特に、オストメイト用のマークはとても分かりやすくて、見やすかった。だが、オストメイトの方でも使えるようなトイレは、大きなショッピングセンターや病院などしかなく、あまりオストメイト用のトイレがないことに気づいた。私は、祖父が外に出かけたがらない気持ちが分かった気がした。私たちは、どこでもトイレが使えるけれど、オストメイトの方はとても不便に感じていると思った。これは、オストメイトだけでなく、どの障がいの方も生活しづらい環境だと感じた。

また、一月の能登半島地震のような大きな災害では、障がいがない人でも過ごすことが大変な環境の時に、障がいを持っている人はとても大変だろうと感じた。私はこの地震を通して、あらかじめ「福祉避難所」を知っておく重要性を感じた。福祉避難所とは、特別な配慮が必要な方を受け入れるための環境が整った避難所のことだ。障がい者が不便なく避難所で生活できるような場所があることは、私たち家族にとっても心の拠り所になると思った。

私は祖父が障がい者になるまで障がいについてあまりよく分からなかった。きっと、オストメイトの存在や福祉避難所についても知る機会がなかったと思う。だが、周りの人が障がいを持つ前に、障がいについて知っておくべきだと感じた。知っておくことで、身の周りに障がいを持っている方がいても、困らずに会話ができたり、その人に合うサポートをしたりできると思うからだ。また、私は祖父が大腸がんと診断される前から、体調を悪そうにしているところをよく見ることがあった。その度に病院に行こうと言っても祖父は病院に行かなかった。あの時、もっと早くに祖父を説得して「病院に行っていたら」と後悔するときもあった。これから先、そんなことが起こらないように、私は病気や障がいの知識をつけたい。私は、障がいを持っている方が暮らしにくい環境ではなく、暮らしやすい環境に変えるべきだと思う。そのためには、周りにいる私たちが障がいについてよく知っておくことが大切だと思う。障がいをもっていても気軽に外に出かけられるような社会になってほしい。

【一般の部】○最優秀賞

「盲導犬を連れた方との出会いについて」

伊藤（いとう）　はるみ

バスを待っていた時に、盲導犬を連れた女性の方が来られました。

私のほうから「盲導犬、大人しく待っておられますね」と話しかけると、その女性の方は、気さくに「この犬が来てから外に出るようになりました」と言われ、それに盲導犬がやってくるまでにだいぶ待ったのをおっしゃっていました。そして、盲導犬とは、いずれ返すというのを聞いて、お別れする時は、さみしいだろうなって思いました。

その女性の方は「もっと盲導犬が増えてくれたらいいんですけど・・・」と言って、バスが来て、先に盲導犬が乗ってから女性の方が乗られて座りました。盲導犬はその前にぴったりと座って大人しくしていました。感心しました。降りる時は、女性の方がアナウンスを聞いて、リードを引っ張って盲導犬に知らせて立たせていました。

同じところでバスを降りて、お礼を言って、いなくなりました。

少しの時間でしたが、盲導犬に会う事がない中、偶然会えて話もして頂き、その女性の方は、突然の話しかけでどう思われたか分かりませんが、私は、盲導犬は、目の見えない方のために寄り添って大人しく行動する姿に感動しました。

人にも寿命があるように盲導犬にも引退する事がある事を知り、かなしくなりました。

視覚障害者と盲導犬との生活を見た事は、ありませんが、盲導犬がやってきてからは、不安な気持ちをやわらいでくれたり、外に出てみるという一歩、勇気を与えてくれるんだろうなって思いました。

盲導犬の賢さや優しさを知りました。

大切な人を守る『責任感』、一緒に過して育まれる『信頼』

盲導犬と出会った事によって、色々思いました。

私がもし目が見えなくなったら、突然の事で、相当な怖さ・不安な気持ちになると思います。それがずっととなると、生活がどうなるのかと。

それが一人で生活している時になると、余計に、とまどい困り動けなくなると思います。どうしたらいいんだろうって。

出会って話しをした女性の方の事を思うと、一人と一匹でバスに乗って出かけるのを見て、すごいなって思いました。

それが何回目で、盲導犬がやってくるまでに、どれくらい待ったかは聞けなかった・・・

そう思うと涙が出ました。

その後、会う事はありませんが、どうか、盲導犬と生活出来てますように。

犬も、おとろえたり、寿命がきたりして、いつか離ればなれになると思うとつらい。

私は、精神障害者で不安になり、つらくなる時がありますが、周りの方に支えられて、生活出来ています。出会った女性の方を思って、めげずに過したいと思います。

女性と盲導犬に出会い、話が出来て良かったです。ありがとうございます。

【中学生の部】○優秀賞

「寄り添う言葉は人を助ける」

富山市立三成中学校　三年
堀（ほり）　勇翔（ゆうと）

障害で最も印象的に残っている人は、「命の授業」の開催者、腰塚勇人（こしづかはやと）さんだ。

腰塚さんは突然の事故で首から下が麻痺した。しかし障害を残しながらも、四ヶ月で立つことができるほどの奇跡的な回復をした人だ。

講演で共感したことがある。それは相手の立場になって人を思いやることの大切さだ。腰塚さんは入院時のお見舞いで言われた「頑張ってね」という言葉に傷ついたそうだ。一般的には励ます言葉だが、体の自由を失った腰塚さんにとっては突き放すような一言に感じただろう。本当は励ましよりも助けて欲しかったそうだ。自殺未遂をしたこともあったが、家族から「何があってもずっと一緒にいるから」や「代われるものなら代わってあげたい」という寄り添いの言葉があって、徐々に心の穏やかさを取り戻していった。

僕はその心境が痛いほどわかる。それは、一度鬱になりかけた経験があるからだ。あの時の僕は学校に行かなきゃと思う気持ちに反して体中が重くなり、ずっと布団の中にいたい気持ちと戦っていた。そして自分の意志通りにならない体に強い不安を感じながらも、自分と向き合う覚悟ができないことが本当に苦しかった。だから自分の力だけでは治らないような気がした。しかし、その後、腰塚さんと同じように異変に気づいてくれた家族が助けてくれたおかげで、少しずつ心の状態を取り戻し、いつも通りに登校できるようになった。もし、家族が気付いてくれていなかったら、自分は完全に鬱になっていたか、不登校になっていたかもしれない。僕は助けてくれた家族に感謝している。

腰塚さんの言葉で言うと、家族は「ドリー夢メーカー」だった。ドリー夢メーカーとは腰塚さんが大切にしている言葉

で、自分の夢を表現しようとする人、他人の夢を応援する人、他人の存在を認め、思いやり、寄り添って生きる人のことだ。僕はこのことから、相手の立場になって人を思いやることの大切さを学んだ。そして助けてもらったからこそ、今後は僕もドリー夢メーカーになりたいと思っている。

僕の理想は、助けられた人が、誰かのドリー夢メーカーになっていくことだ。そうすると不安や悩みを話せる相手ができたり、解消したりする関係ができる。寄り添う言葉は、人を助けることができる。未来の助け合える環境は、もしかしたらドリー夢メーカーからはじまるのかもしれない。

【中学生の部】○優秀賞

「普通の人とは違う自分」

富山市立三成中学校　三年
桐澤蓮樹（きりさわれんじゅ）

僕には持病がある。それは「チック症」だ。「チック症」とは、首振りや瞬きなどといった運動チックと、咳ばらいや奇声などといった音声チックがあり、本人の意思に関係なく繰り返してしまう疾患だ。

僕が「チック症」なのではと両親が疑いはじめた最初の症状は、3歳頃から始まった言葉の吃りだった。それから成長と共に、チック症のいろいろな症状が代わる代わる現れた。自分で気にしだしたのは、小学一年生の頃だった。静かにしないといけない授業や集会などでは、普段と比べて症状はでないが、終わった後に抑えられなかった。恥かしい、変な人と思われるのではないか。そのことが頭をよぎった。僕は母に相談した。母のアドバイスは意外なものだった。「チック症であることを隠すな。」だった。僕はそれから勇気を振り絞って友達に自分は「チック症」だということを話した。話しても友達は、今まで通り接してくれた。すごく嬉しかった。不安だった気持ちが少し安らいだ。それからも「チック症」は落ちついたり悪化したりを繰り返した。中学に進学し、新しいクラスメイトが増えた。授業中にチック症状が出ると不思議な顔をされることがあった。僕は恥ずかしさとチック症状が抑えられない苛立ちでストレスが溜まった。家に帰り、思いっきり歌ったり、ゲームをしたりしてストレス発散した。少しは落ちついたが、まだ気になるくらいであった。ネットでも調べた。そこには、男子に多い、成人になるまでに約50％の人は自然治癒していくと書いてあった。僕は成人になるまでに治るのかとても不安になった。しかし、長年「チック症」と向き合っていると、学期始めなど環境に変化があると、「チック症」が悪化することが分かった。日常生活に慣れていくと落ちついていく。やはり、緊張が悪化させていくのだと思

う。でも僕には「チック症」を理解してくれている人が多くいる。これは自分にとって一番の支えだ。

僕たちの生きている世界には、「チック症」で苦しんでいる人がたくさんいる。僕の場合は自分で説明し、理解してもらい、「チック症」と共に過ごしているが、そうではない人もいるだろう。「チック症」に限らず障害や病気には理解されにくいことが多く、どのような病気なのかだけでも知ってほしい。

僕は今も「チック症」が治っていないが、「チック症」の人や障害、病気のある人が苦しく思わず安心して過ごしていける未来になる事を僕は願っている。

これからも「チック症」である自分のことを受け入れて生きていく。

【高校生の部】○優秀賞

「笑顔のために」

富山県立南砺福野高等学校　一年
出村琳湖（でむらりこ）

『障害』と聞いて何が頭に浮かびますか。私は、昔障害に対してよく理解ができていませんでした。しかし、身近にいた障害を持っているR君との出来事を通して障害への理解が深まりました。

障害は、大きく分類すると身体障害・知的障害・精神障害の三つがあります。ほとんどの人が『障害』と聞いて最初に思い浮かべたのは、身体障害のことでしょう。各障害にもまた、たくさんの種類があります。「足や腕、指が動かない」「耳が聞こえない」「目が見えない」などの身体障害が例としてよく目にするものです。

しかし、今回出てくるR君は、知的障害の中の種類の一つの発達障害を持っています。発達障害とは、脳機能の発達が生まれつき違い、行動や情緒の面に特徴がある状態のことをいいます。

私とR君は、祖父母の家とR君の家が近かったので、小さい頃はよく遊んでいました。その頃は、障害を持っていることは全然知りませんでした。しかし、小学校に行き始めるとR君は障害がある子が集まるクラスに居ました。母に聞くと発達障害を持っている子だと分かりました。発達障害とは何か、小学校の頃はまだわかっていなかったので、普通に遊んだり話したりしました。

ある日、私の友達から一つの噂を聞きました。それは、R君がH君から嫌がらせを受けているということでした。明らかにいじめなのに先生は注意で終わったそうです。納得がいかなかったので、R君に、

「どうしていじめだといわなかったの？」

と聞いてみました。R君は、

「大丈夫だから」

と言いました。本人の意見を尊重したかったのでこの件はスルーをしました。

しかし、何年かしたらまたR君がいじめられていると聞きました。クラスが違うので全然気付かなかったのが悔しかったです。

中学校になってからもいじめは続いていました。やっとその現場を目撃しました。H君は、R君を蹴ったのです。当時、私と仲の良かった子と目撃したので二人でR君に話を聞きました。すると、ずっとされていたとを一つずつ教えてくれました。H君は、R君を見下していたそうです。これは、大変だと思い先生に言って良いかを聞くと首を横に振りました。

「どうして？」

と聞くと、

「母に知られたくないのと、また障害を持っているのが理由で嫌がらせを受けたくないから」

と弱弱しい声で私たちに訴えてきました。しかし、このまま放っておくと終わらないと思い、もう絶対嫌がらせをできないように、R君が平和に生活できるように守ることと、R君の母にR君のことを理解してもらうように今までのことを伝えることの二つを約束しました。そして、大人の助けを得ようと、話しやすい私たちの部活動の先生に相談しました。先生は熱心に疑わずに私たちの話を聞いてくださりました。最後まで話を聞いてくださった先生が、R君の担任の先生と学年主任の先生にも伝えるべきだと言い、呼んできてくださりました。呼ばれた先生方にまた詳しく一つ一つ説明しました。この先生方も最後まで真剣に話を聞いてくださりました。その後学年主任の先生が優しくR君に声を掛けました。「親御さんへの説明はしっかりするしH君にもしっかり伝えて今後いじめをしないと約束してもらうけど、もしまたいじめられたらすぐに言ってほしい。絶対見て見ぬふりはしないから」とR君の目を見てゆっくりと話しました。R君は、泣きながら頷きました。

先生はすぐにH君を呼んで話を聞いてH君がやってしまったことの重大さを気付かせ、もうしないと約束していたのを後から聞きました。少し経ってからR君を見ると、小さいころ一緒に遊んでいた時に見た明るい笑顔がありました。私は、とても心が晴れました。話しかけるとR君が描いたイラストや牛乳のパックで作ったものを嬉しそうに見せてくれました。見せてくれているときにまたいじめられていないか聞きました。R君は、「もう大丈夫だよ。助けてくれてありがとう」と言ってくれました。

たとえ障害を持っていても、すべての人はみんな平等に生

まれてきた人間だから、障害を理由にいじめられたり差別されたりするのは絶対にダメだと思います。Ｒ君のように誰かが行動することで救われる方がたくさんいると思います。私もＲ君が元気になったことですごくうれしいです。このような人と人の輪を大切にしていきたいと思います。

【高校生の部】○優秀賞

「「伝える」ことの大切さ」

富山県立南砺福野高等学校　二年
松田侑佳（まつだゆか）

私は母に誘われたことがきっかけで、高校一年生の頃から毎週金曜日、手話講座に通っている。その手話講座で、私は講師である聴覚障害者の方と手話通訳士である方と出会った。聴覚障害とは、音を聞く、または感じる経路になんらかの障害があり、話し言葉や周囲の音が聞こえなくなったり、聞きづらくなったりする状態のことだ。そのため、聴覚障害者の方は、放送や呼びかけが聞こえないことでコミュニケーションが難しい。また、聞こえないことで周りの人から誤解されてしまうことがあるそうだ。聴覚障害者の方のコミュニケーションを助ける専門職が手話通訳士だ。手話を通して聴覚障害者の方とそうでない方との通訳をしたり、講演会などで音声言語を手話に変えて聴覚障がいの方に伝えたりすることで様々なコミュニケーションのサポートを行っている。私は手話が全くできなかったため、聴覚障害者の方とコミュニケーションをすることはできるのかと心配になっていた。しかし、手話を習っていくうちにできる手話も増えていき、挨拶や自己紹介ができるようになった。また、簡単な手話であれば読み取ることもできるようになった。手話は、伝えることが難しかったり、覚えることが多く大変だったりするが、手話を通してコミュニケーションができることはとても楽しいと感じている。

私は手話を学んでいくうちにどんどん手話に夢中になっていった。手話をもっと覚えるために手話の辞書を買った。少しでもできる手話を増やして、色々な話題で聴覚障害者の方とコミュニケーションがしたいと思ったからだ。私は手話を覚えることこそが聴覚障害者の方とのコミュニケーションで最も大切なことだと思っていた。

ある講座の日、手話通訳士の方から言われた言葉が特に印

象に残っている。「手話は全部が全部、わからなくてもいいんです。どんな話題で話しているか、なんとなくわかればいい。わからない手話があれば聞けばいい。」その言葉は私にとって衝撃だった。すべての手話が分からなければ、コミュニケーションができないものだと思っていたからだ。確かに、すべての手話ができればスムーズに話をすることができると思う。だが、コミュニケーションで大切なことは、手話ができる、できないではない。相手のことを思いやり、理解しようとする気持ち、伝えようとする気持ちが大切だと私は感じた。私は手話を覚えることに必死になってしまい、聴覚障害者の方、その人自身のことをよく見ていなかったと思う。

手話は聴覚障害者の方とのコミュニケーションで大切な表現方法の一つだ。だが、コミュニケーションは手話だけではない。筆談や口話、ジェスチャーなど様々な方法がある。手話が分からなければ、他の方法を使ってコミュニケーションをすればいい。わからない手話があれば直接、「この手話、何？」と聞けばいい。

聴覚障害者、だから手話で会話をする必要がある。ではない。大切なことは、相手に伝えようとする気持ちだ。簡単なことのように感じるがとても重要なことだ。それは、手話に限らず、筆談や口話、ジェスチャーで伝えるときにも言えることだ。それに伝えようとする気持ちに障害がある、なしは関係ない。相手に伝えようとする気持ちがあれば、きっとコミュニケーションがうまくいくと私は思う。聴覚障害者の方とコミュニケーションをすることは、できるか不安で心配だと思う。けれど、それは聴覚障害者の方もコミュニケーションができるかどうか不安な気持ちのはずだ。私たち以上に不安な気持ちかもしれない。だからこそ、伝えようとすること自体が大切だ。自分が伝えようと思っていれば、自分が伝えようとしていることが、相手にも伝わり、互いに伝えようとすることができるからだ。

高校二年生になった私は、今も毎週金曜日、手話講座に通っている。手話は楽しいが、相変わらず難しい。私は以前よりも手話が楽しく感じる。それはきっと手話だけを見ているわけではないからだ。講師の方、受講している方の表情、笑い声、そのすべてを私は感じている。手話だけを意識しすぎず、相手自身のことをよく考えること。伝えようとする気持ちを持つこと。今日もまた、私はその気持ちを持って、手話講座に行く。不安よりも楽しみを大きく持って。

障害者週間のポスター
○最優秀賞
【中学生の部】

「支えよう障害者」

射水市立小杉南中学校　三年

山　本　大　智（やまもと　だいち）

○優秀賞

【中学生の部】

「互いにわかりあえる社会へ」

射水市立小杉南中学校　三年

出本（でもと）　一（いち）

「心のピース」

射水市立小杉南中学校　三年

長谷川（はせがわ）　奈（な）　南（な）

令和六年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領

1．趣　旨

障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会を目指し、障害者に対する国民の理解の促進を図るため、「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」を募集するもの。

2．主　催　内閣府、富山県

3．主　管　富山県身体障害者団体協議会

4．後　援　富山県教育委員会、社会福祉法人富山県社会福祉協議会

5．募集テーマ

⑴　心の輪を広げる体験作文

出会い、ふれあい、心の輪 ― 障害のある人とない人との心のふれあい体験を広げよう ―

⑵　障害者週間のポスター

障害の有無にかかわらず誰もが能力を発揮して安全に安心して生活できる社会の実現

6．応募資格

⑴　心の輪を広げる体験作文

小学生、中学生、高校生及び一般（義務教育学校、特別支援学校の小学部、中学部及び高等部の児童生徒を含む。）

⑵　障害者週間のポスター

小学生及び中学生（義務教育学校、特別支援学校の小学部及び中学部の児童生徒を含む。）

7．募集の方法

(1) 心の輪を広げる体験作文

① 作文の題名（タイトル）及び内容

作文の題名（タイトル）は自由とし、内容は、障害のある人とない人との心のふれあいの体験をつづったものとする。

なお、応募は、未発表のもの一編に限る。

② 募集の区分

小学生区分、中学生区分、高校生区分及び一般区分の四区分とする。

③ 制限字数、用紙の様式、作成方法等

ア． 一編当たりの制限字数は、小学生区分及び中学生区分については、四〇〇字詰め原稿用紙二～四枚程度とし、高校生区分及び一般区分については、四〇〇字詰め原稿用紙四～六枚程度とする。

イ． 用紙は、原則として四〇〇字詰め原稿用紙（B四判又はA四判。縦書き）を使用する。

ウ． パソコン等の電子機器による作成も可とする。この場合、用紙はイ．に準じるものとする。

エ． 第三者が知的財産権を保有する著作物を使用しないこと。

④ 応募者の属性等に関する資料（属性表）

作者の属性表（指定様式）の項目に従い、氏名、住所、年齢（生年月日）、所属先（学校名・学年又は職業）、電話番号、ＦＡＸ番号、障害の有無・程度、作品の題名（タイトル）及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

⑤ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇-〇〇九四　富山市安住町五-二一　TEL〇七六-四四四-〇二一三

⑥　募集期間

令和六年七月一日（月）から八月三十日（金）までとする（当日消印有効）。

⑵　障害者週間のポスター

①　作品の題名（タイトル）及び内容

作品の題名（タイトル）は自由とし、内容は、障害者に対する理解の促進等に資するものとし、障害のある人とない人の間の相互理解・交流等を造形的表現で訴えるものとする。

なお、応募は、未発表のもの一点に限るものとし、作品中に標語それに類する文字は入れないものとする。

②　募集の区分

小学生区分及び中学生区分の二区分とする。

③　規格、画材、作成方法等

ア・規格は、画用紙のＢ三判（横三六四㎜×縦五一五㎜）又はいわゆる四つ切り（横三八二㎜×縦五四二㎜）を使用し、これに満たない作品は、Ｂ三判の台紙に貼付する。なお、作品は縦位置（縦長）のみとする。

イ・彩色画材は、自由とする。

ウ・第三者が知的財産権を保有する著作物を使用しないこと。

④　応募者の属性等に関する資料（属性表）

作者の属性表（様式）の項目に従い、氏名、住所、年齢（生年月日）、所属先（学校名・学年）、電話番号、ＦＡＸ番号、障害の有無・程度、作品の題名（タイトル）及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

⑤　応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇-〇〇九四　富山市安住町五-二一　TEL〇七六-四四四-〇二一三

⑥　募集期間

令和六年七月一日（月）から八月三十日（金）までとする（当日消印有効）。

8．選　定

応募された作品については、審査のうえ、各区分ごとにそれぞれ最優秀賞、優秀賞を九月二十日（金）までに決定し、入選者に通知する。最優秀賞作品は、富山県代表として内閣府へ推薦する。ただし、内閣府では、より多くの方に受賞の機会を設けるため、過去を通して入賞は一度限りであることから、過去の入賞者は内閣府へ推薦しないものとする。

9．表　彰

富山県で表彰式を行い、最優秀賞受賞者及び優秀賞受賞者にそれぞれ賞状及び副賞（一万円相当、五千円相当）を贈る。

また、応募者全員に参加賞を贈る。

10．個人情報

応募者に関する参考資料に記入した個人情報はこの募集の連絡や参加賞送付のみに使用する。

ただし、入賞者の個人情報は内閣府への推薦や作品集、ホームページの掲載に使用する。応募者は、あらかじめこの旨同意のうえで応募するものとする。

11．その他

募集作品は、障害者週間行事等の終了時に返却する。

令和６年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況

１　「心の輪を広げる体験作文」応募状況

	計
小　学　生	0　編
中　学　生	19　編
高　校　生	81　編
一　般	1　編
合　計	101　編

２　「障害者週間のポスター」応募状況

	計
小　学　生	0　点
中　学　生	11　点
合　計	11　点

令和六年度

「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿

浜谷尚生	元水橋郷土史料館長
島崎俊哉	富山県県有美術品管理事務員
関口　正	富山県社会福祉協議会事務局次長・総務企画課長
布尾英二	富山県身体障害者団体協議会会長
平野幹夫	富山県手をつなぐ育成会常務理事・事務局長
折江鈴子	富山県精神保健福祉家族連合会副理事長
小林雅弘	富山県厚生部健康対策室健康課主任
河合智昭	富山県教育委員会教育みらい室特別支援教育課指導主事
河尻茂明	富山県厚生部障害福祉課長

心の輪を広げる体験作文・
障害者週間のポスター入賞作品集
―出会い、ふれあい、心の輪―
令和六年十一月発行
発　行　富山県厚生部障害福祉課
印　刷　富山生きる場センター